

# 一八五七年恐慌 (三)

三 宅 義 夫

## 七

さきに註記しておいたように、一八五二年十二月、トーリー党のダービー内閣にかわつてホイッグ党、ピール派連立のアバディーン内閣が成立した。

一八五三年に入つて、『トリビュン』所載の論文「政治的見透し。―事業の繁栄。―飢死事件 (Politische Aussichten. — Handelsprosperität [Commercial Prosperity. — M. Rubel; Bibliographie p. 34]. — Fall von Hungersnot)」(一八五三年一月十四日付、『トリビュン』一八五三年二月二日号所載、Gesammelte Schriften, herausgegeben von N. Rjasanoff, Bd. I, S. 64—72、改造社全集訳、第五巻、五〇—九ページ)のなかで、マルクスは、「新年の年頭に当り事業の繁栄の継続と増大とが声高く叫ばれたが、さらにそれに確証を与えるに役立ったものは、本月五日までの国家収入報告書、本月および一八五二年十二月五日にいたる十一ヵ月間の商務省の諸表、さらに工場検査官報告書、および最後に、前年中の商取引についての概観を与えるところの毎年はじめに公表される商況報告書 (Handelsberichte) であった」として、それらそれぞれの報告書がいかに繁栄を報じているかを列挙して紹介している。いま、一つの例としてマルク

スが商況報告書から製鉄業および木綿工業について記しているところを掲げておこう。「とくに盛んなのは製鉄業である、というのは、鉄はトン当り五ポンドから一〇ポンド一〇シリングに、さらに最近には一二ポンドにまでも騰貴した。おそらくこれは一五ポンドまで騰貴するであろう。しかもますます多くの熔鉱炉が使用されている」。「工業地域一般の、また特殊的には綿業地域の繁栄は、すでに工場検査官報告書から見られたところである。John Wrigley & Son 商会(リヴァプール)は綿業についてつぎのように報告している、『わが国の一般的繁栄の徴として、昨年における木綿工業の増進ははなだ喜ぶべきことであり、そしてそこにはいくつかの驚くべき事実が現われていた。そのなかでもっともいちじるしくかつ人目をひいたことは、アメリカ合衆国の生産物たる約三百万梱という未曾有の収穫が、信じられないほど容易に製品化されたことである。……すでに多くの地域において、工場経営の一その拡張が準備されており、来年にはいままでもっとも大量の棉花が製品化されるであろうと期待することができる』。そしてマルクスはこうした列挙をつぎのような引用で一応結んでいる、——「マンチェスターからの一報告は一般的情况を総括して、きわめて適切につぎのように述べている、『われわれは、不活発であり貨幣が不足しているという印象よりも、むしろ過度投機の印象をはるかに受けている』(傍点—マルクス)と。

ところでこれにつづいてマルクスは、この一八五三年一月六日にイングランド銀行がそのバンク・レート<sup>1</sup>/<sub>2</sub>パーセント引上げ、二<sup>1</sup>/<sub>2</sub>パーセントとしたことについてつぎのようにやくわしく論じている(バンク・レートの動きについては、筆者稿「一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」(一)、『立教経済学研究』第十卷第二号「九ページの「バンク・レート」の表および同三ページの図参照)。

「こうした一般的繁栄のさなかにおいて、最近イングランド銀行が採った一措置が商業界の一般的驚愕をひきおこ

している。同行は一八五二年四月二十二日に割引率を二パーセントに引下げていた。一八五三年一月六日の朝、割引率が二パーセントから二½パーセントに、すなわち二五パーセントの引上げが行われたという知らせがひろまった。ある人はこの引上げの理由を、最近若干の鉄道敷設大企業家がなした大きな負債(*die große Verbindlichkeiten*……, *die kürzlich einige*…… *eingegangen waren*)——これについては、かれらは非常に多額の手形を振出している(*im Umlauf haben*)ことが知られている——によって説明しようとした。ロンドン・サン紙はまたも、イングランド銀行もまたはやり、割引率の引上げによって一般的繁栄から利益をえようとしたのだ、と見ようとした。この措置は、一般に『不必要』だと非難された。読者がこの措置を十分に評価しうるように、ここにエコノミストが掲げている記録を掲げよう。

# イングランド銀行

金		有価証券 <sup>1)</sup>		割引レート	
	ポンド				
一八五二年四月二十二日	一九、五八七、六七〇	二三、七八二、〇〇〇	二%に引下げらる		
〃 七月二十四日	二二、〇六五、三四九	二四、〇一三、七二八	〃		
〃 十二月十八日	二二、一六五、二二四	二六、七六五、七二四	〃		
〃 〃 二十四日	二〇、七九四、一九〇	二七、五四五、六四〇	〃		
一八五三年 一月一日	二〇、五二七、六六二	二九、二八四、四四七	二%ただし一月六日に二½%に引上げらる		

したがって、利子率が二パーセントに引下げられた一八五二年四月におけるよりも、イングランド銀行にある金は百万ポンドほど多い。しかしこの二つの時期の間には大きな差異がある、というのは、金の運動が満潮から干潮に変わっているからである。流出は、アメリカおよびオーストラリアからの前月の金輸入総額をこえているから、とくに強

い。その上、四月における「イングランド銀行保有の」有価証券は、現在よりも五百五十万ポンドすくなかった。したがって、四月には貸付資本の供給の方が需要よりも大であったが、現在ではその反対となっているのである。<sup>2)</sup>

延べ金の輸出に伴って外国為替相場のいちじるしい低落が生じた「Die Ausfuhr des Barrengoldes war begleitet von einem merklichen Sinken des ausländischen Wechselkurses. これはむしろ逆で、低落に伴って金輸出が生じた、というのであろう。ドイツ語訳のさいの誤り?」。この事情は、一部は、大多數の輸入品の価格のはなはだしい騰貴によって、一部は、輸入品の投機の拡大によって、説明されるべきものである。これに加えてなお、秋および冬の天候不良が農業に及ぼした影響や、つぎの収穫にたいする疑念と憂慮や、また随伴現象としての外国の穀物、穀粉にたいする大きな投機がある。最後に、イギリスの資本家たちは、フランス、スペイン、イタリア、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、ドイツ、およびベルギーにおける鉄道およびその他の会社の設立に大いに参加してきたし、またさらに、現行パリの取引所で支配している一般的な幻惑に参加している。それゆえ、ロンドン向けの手形がヨーロッパのすべての市場において以前のいかなるときよりもずっと多く現われてきており、そのため為替相場の継続的な低落が生じているのである。七月二十四日には一ポンドは二五フラン三〇サンチームに等しかったが、一月一日にはわずか二五フランとなり、しかもところによつては二五フランを下廻っている「当時の英仏為替相場の法定平価は一ポンド＝二五フラン二〇サンチーム」。

したがって、資本にたいする需要が供給に比して増大したかぎりにおいては、イングランド銀行の最近の措置はまったく正当なものと見受けられる。しかしながらそれが投機および資本の海外移動 (Abwanderung des Kapitals) を阻止すべきものであるかぎりにおいては、私はそれが完全に失敗することをあえて予言するものである」(この部分

a. a. O. S. 69—71. [「内—三宅」以下同。]

(1) ここは „Sicherheiten“ と訳されているが、これはおそらく securities の訳であろう。イングランド銀行の保有する各種の有価証券——いわゆる手形を含む——であって、これが増大していることは貸付資本にたいする需要が増大していることを意味する。

(2) 上のようにマルクスは、一八五二年四月と現在とを対比して、一方においてイングランド銀行にある金量は四月よりも百万ポンド多いが、しかし他方において保有有価証券が四月よりも五百五十万ポンド多い、「したがって」、イングランド銀行における貸付資本の需給関係は四月のさいよりも現在の方が窮屈である、といっているのであるが、一般的にいって、イングランド銀行における貸付資本の供給力について見る場合には、同行の金保有高を挙げてもはつきりしたところはわからない。金保有高がふえれば、それだけ同行発券部の銀行発行高はふえるが、しかしそのふえた額だけ同行銀行部の保有銀行券、つまり同行銀行部の現金準備、つまり同行としての貸付余力、がふえるとはかぎらなく、もし他方で流通銀行券がふえるならば、銀行部の保有銀行券はそれだけすくなくなる。したがって同行における貸付資本の需給関係を見る場合には、金保有高と併せて、あるいはむしろ、この銀行部保有銀行券の量の動きが挙げられねばならない。なお本誌前号註(17)で『資本論』からの引用文中に加えておいた筆者の書入れ参照。

このようにマルクスは、一八五二年の繁栄につづいて一八五三年も繁栄がつづき、これがさらに増大することが一般に予期されていると報じるとともに、年初の一月六日にイングランド銀行の公定歩合が $\frac{1}{2}$ パーセント引上げられたことに注意を払い、ここに繁栄のさなかに一点の暗雲が現われてきたことを見ている。イングランド銀行の金属準備が流出に転じてきたこと、これは為替相場が逆調になったためであるが、この為替相場の逆調はなにによつてもたらされたか、として、不作とこれに伴う穀物輸入投機、ならびに海外の会社への投資、それとパリ取引所での投機ブームへの参加、を挙げ、そして、バンク・レートの引上げは、イングランド銀行への貸付資本にたいする需要増大——同行保有有価証券の増大に反映されているところの——を抑えることはできるとしても、この金流出を生ぜしめている

諸要因を阻止することはできない「一般的に言えば、不作による金流出には効がないであろうが、その他の要因にたいしては「完全に失敗する」とはかならずしもいいがたいであろうが」、と述べているわけである。バンク・レートが二パーセントに下げられていたのはむしろ異常な低きであつて、これが二 $\frac{1}{2}$ パーセントに引上げられても、絶対的な高きでは決して高いものではなく、なおきわめて低い。しかし、情勢が變つてきたことが注目をひいたのである。なお、この前年十半月に書かれた『トリビュン』の論文においては、「一八五三年に……破局に突入する」「徴候」として金流入と「イングランド銀行における金の過充」とを挙げ、「為替相場がイギリスにとって順」となっていること、「貸付可能な資本の一時的な過剰と低い利子率」、こうしたことから、投機が助長され、繁栄が、破局の先駆であり繁栄の最頂点である「発作」期に入ることを書いていたのを想起されたい。

つぎの一八五三年一月二十一日付の論文「選挙。——陰鬱な金融情勢。——サザーランド女公と奴隸制(Wahlen. — Tybe Finanzlage. — Die Herzogin von Sutherland und die Sklaverei)」(『トリビュン』一八五三年二月九日号所載)のなかにおいてもこの金融事情を報じ、つぎのように述べている。「長い議論ののち「なにを基にしてマルクスがこういつているかはわからない」昨日「二月二十日」イングランド銀行理事会は最低割引率(「バンク・レート」は最低率であつた)を二 $\frac{1}{2}$ から三パーセントに引上げた。このことはパリ取引所に即座に影響を与え、同取引所ではあらゆる種類の証券が近頃での低落を見た。だが、イングランド銀行がパリでの投機を抑制するのに成功したとしても、延べ金流出にとつてまだ一つの出口が残っているであろう、穀物輸入がこれである。イギリスおよび大陸での最近の収獲は、一部の評価によると、平均より三分の一ほどすくないとのことである。また、播種が土地のしめついているため遅れているので、つぎの収獲までの間に用いうる食物量について疑念がつよくなっている「収獲も遅れるであろうから、というのであ

ろう。かくてすでに大量の穀物輸入の準備がなされており、その結果為替相場は依然としてイギリスにとって逆調をつづけるであろう。オーストラリアからの金を積んだ船も穀物輸入の突然の増加に歩調を合わせることはとうていできない。／＼最近の通信の一つにおいて、私は現在行われている鉄投機について言及しておいた（「ここで指しているのは、これより一週間前の一月十四日付通信でのさきに引用しておいた「製鉄業」にかんする記述のことであろうか」。イングランド銀行による二から二 $\frac{1}{2}$ パーセントへの割引率の第一回の引上げは、この事業部門にすでに影響を及ぼした。最近十四日間七八シリングしていたスコットランド銑鉄は、今月十九日には六一シリングに下落した。／＼鉄道株の市場も、利子率引上げの結果、おそろく、これまで担保として差入れられていた株式の強制売立によって圧迫を蒙ることとなる。この過程はすではじまっている。だが私の見るところでは、イングランド銀行からの金流出は、ひとり金の輸出によってひきおこされたのではなく、国内の事業の、とくに工場地帯での、活潑な発展も、それに大きく与っている〔金貨流通量の増大〕」（Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 73—4, 改造社全集訳、第五卷、五一〇ページ、大月選集訳、第六卷、一五七—八ページ）。

バンク・レートは一八五二年一月一日に、約一年つづけられてきた三パーセントから二 $\frac{1}{2}$ パーセントに引下げられ、ついで同年四月二十二日に二パーセントに引下げられたのであるが、これが一八五三年に入るや、一月六日、二週間後の二十日と、一月中に $\frac{1}{2}$ パーセントづつ再度引上げられ、以前の三パーセントの線まで戻された（そしてこのあと同年六月、九月に引上げられ、九月末には五パーセントになっていった）。かくて、一八四七年恐慌後、一八五七年恐慌にいたる循環期間の、バンク・レートの下降、上昇の線において、一八五二年四月二十二日から五三年一月六日までが二パーセントという最低の谷底をなし、そこまでの下降傾向にたいし、それからは逆の運動が見られる（筆者稿「一八七〇年代

およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」で言及しておいた『トリビニ』一八五七年十一月三十日号所載のマルクスの論文、『立教経済学研究』第十卷第二号、一五〇六ページ参照)。この動きについてはのちにまたくり返し見ることとなるが、いま見ている時点はこの谷底から転換をはじめた時に当るわけである。

つぎの一八五三年一月二十八日付の論文「死刑。—コブデン氏のパンフレット。—イングランド銀行の布告 (Die Todesstrafe. — Herrn Cobdens Pamphlet. — Anordnungen der Bank von England [Regulations of the... — M. Rubel; Bibliographie, p. 95])」(『トリビニ』一八五三年二月十八日号所載)では、この公定歩合の変更について、「イングランド銀行の最近の割引規定がひきおこしたパニックはいまは後退しており、そして、實際家も理論家も、現在の繁栄はひどく脅威や危険を受けることはないであろうと確信している」と報じるとともに、『エコノミスト』が、農業事情がはなはだ悪く、広い地域にわたって播種が行われておらず、また播種されたところでも発芽状態がよくないと記していることを引用し、そしてつぎのように述べている。——「したがって、カリフォルニアおよびオーストラリアで市場ならびに鉱山が開発されたためにやや遅らせられていた (etwas verzögert wurde) 恐慌は、凶作となれば、疑いなくはじまるであろう (wird zweifellos einsetzen, wenn eine schlechte Ernte erfolgt)。イングランド銀行の割引率改訂は、これにたいする最初の前兆 (die ersten Vorzeichen) にすぎない。一八四七年には同行は割引率を十三回変更した〔公式には九回であった〕。一八五三年にはおそらくそれは二十回も行われるであろう」(Gesammetliche Schriften, Bd. I, S. 85—6, 改造社全集訳、第五卷、五二三ページ、大月選集訳、第六卷、一七五ページ)。

一八四七年恐慌後待ちに待った恐慌が、凶作をモメントとしていよいよこの一八五三年に到来するであろう、年初早々におけるバンク・レートの再度の引上げはその前兆たるものである、こうマルクスが確信を持ってきたことが窺



われる。マルクスはまた、この『トリビュン』への通信と時を同じくして——この通信の日付の翌日の一八五三年一月二十九日付の手紙で——、エンゲルス宛につきのように書き送っている。「冬の収穫の状況から見て、僕はいよいよ恐慌がやってくるだろうと確信している (ich bin überzeugt, daß die Krisis nun will become due)」。主要商品や食料品がかなり豊富かつ低廉であった間は、オーストラリアその他と相まって事態はなお長びくことができた。いまやこれにストップがかけられるであろう。ともかく (Uebrigens) たえば『エコノミスト』がイングランド銀行の最近の割引率改訂 (discountregulation) を弁護して、その目的は『資本の輸出を防止する』にあると書いているのも、別に異様に響かない。われわれは、これがなにを意味するかをよく知っている (Wir wissen recht gut, was dies soll)。「この意味は、バンク・レート<sup>3)</sup>の改訂は金流出の阻止を目的としているものであり、この金流出が産業循環のいかなる段階において生じ、それがどういう意味をもつかを、われわれは知っている、というようなことであろうか」<sup>4)</sup>。

(3) 一八五三年一月二十八日付論文の上掲のところにつづいて、マルクスはつぎのように述べている。「——「終りに臨んで、エコノミストにたいしてつぎの質問を呈したい、すなわち、近代の経済学がマーカンティリズムにたいして戦端を開くに當つて、一国における金の流入・流出はその国にとってはどうでもよいことであり、生産物は生産物とのみ交換されるのであって、金は他の生産物と同じように一つの生産物である、ということを立て証したのはどういふわけであるか。そして、この同じ経済学が、その生涯の終りに立っている現在、金の流出入をきわめて心配して眺めているのはなぜであるか? エコノミストはいう、『イングランド銀行がその操作によって達成すべき真の目的は、資本が輸出されるのを防止することである』と。しかしながらエコノミストは、棉花や鉄や羊毛糸や織物の形で資本の輸出を阻止したいとも思っているのであろうか? そして、金は他の生産物と同じような一生産物ではないのか? それとも、エコノミストは老後にいたつて重商主義者になったのであるか? そしてかれは、外国資本の輸入が自由になったあとで、イギリス資本の輸出をこばもうとするのであるか? かれは、文明的な保護関税制度から解放されたあとで、トルコのな保護関税制度へでも逆戻りしようとするのであるか?」(Ge-

sammelte Schriften, Bd. I, S. 86, 改造社全集訳、第五卷、五二三ページ、大月選集訳、第六卷、一七五一六ページ)。

そして右の翌日書かれていて一月二十九日付の手紙においても、この『エコノミスト』が「資本の輸出を防止する」といつていることを上掲のように取上げているが、そこでもまた上につづいてつぎのように記している、「しかし、人々の自由貿易論者の良心はつぎのような質問によつて狼狽せざるをえないであらう、すなわち、諸君は棉花や糸、等々の形態での『資本の輸出』をも同様に防止しようとするのであるか？ それならなぜ金の形態におけるそれを防止するのか？ 自由貿易経済学が純然たるマーカンティリズムに復帰し、金の流出入をなによりも肝腎なもの(nervus rerum)とみなすということは、自由貿易経済学の終焉であるのか？」と。

この問題はマルクスの大いに興味をもったところであつて、『グランドリッセ』の一八五七年十月に書かれたとされている第一冊のなかでもつぎのように述べている、「実際のところ、地金の流出には一つの矛盾があらわれている。……金と銀とはけつして他の商品と同じような商品ではないということ、そして近代の経済学が一時的にたえず重商主義の偏見に立戻つてゐる自分自身に突然びっくりして気がつくということは、明らかなことである。イギリスの経済学者は、ある区別をつけて困難を解決しようとしてゐる。こうした金融恐慌の瞬間に求められるものは——とかれらはいう——貨幣としての金や銀、鑄貨としての金や銀ではなくて、資本としての金や銀なのである。資本、だが金や銀という、一定の形態においての資本(Kapital, aber Kapital in der bestimmten Form von Geld und Silber)」とつけ加へることをかれらは忘れてゐる。ちやなれば、資本がどんな形態においても輸出できるならば、金銀以外の大部分の商品は流出の不足のために「つまり国外で売れないために」減価してゐるのに、まさにこれらの「金や銀という」商品が流出するのはどういふわけからであらうか？」(Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, S. 46—7, 大月選集訳、第九卷、三〇二—三三ページ、傍点および「」内三宅。なお筆者著『貨幣信用論研究』四二二—二二二ページ参照)。あるいはまた、同じく『グランドリッセ』の一八五八年の前半に書かれた第七冊でも、J・フラーテンの著 *On the Regulation of Currencies* を論じてゐるところで、フラーテンの、*This, in fact, is not a question of currency but of capital* ”と云ふ文章のところに「このやうな書入れを挿入しては、」*「これはちやいな貨幣の問題であり、通貨の問題でも資本の問題でもなく(Dies ist vielmehr a question of money, not of currency, and of capital neither)」* といふのは、求められてゐるのは、それが存在してゐるやうに採つてゐる特殊な形態はちやいなやちやいな資本なのではなく、貨幣という特殊な形態にある価値だからである (because not capital, which

is indifferent against the special form in which it exists, but value in the specific form of money is requested」(Grundrisse, S. 756) 云。

そして後年の『資本論』においても、フラートンのかかる所説を批判して、「需要はまさに、外国市場がイギリス製の實現されえない商品資本をもつて充満している瞬間に生じる。かくして、要求されるのは資本としての資本ではなくて、貨幣——一般的な世界市場商品たる形態での貨幣——としての資本である」(Bd. III, S. 494, 長谷部訳、青木版六四四ページ、傍点—マルクス)と論じていることは周知のとおりである。また、「啓蒙された経済学は……銀行制度を取扱うとなると、一切が逆転して、金銀は資本それ自体 (das Kapital per excellence) となり、その維持のためには資本および労働の他の形態はいずれも犠牲に供されねばならぬこととなる」(Bd. III, S. 620, 同上訳、八〇九ページ)、またいわく、「近代制銀行制度が金の流出にたいして抱く畏怖は、貴金屬を唯一真実の富となす重金主義がかつて夢想した一切のものを凌駕する」(Bd. III, S. 495, 同上訳、六四四ページ)。筆者稿「信用理論の体系」(講座・信用理論体系『第一巻所収』七一—三三ページ参照)。

(4) なお、マルクスは一八五一年二月三日付エンゲルス宛の手紙で通貨主義批判を行い、またそれについて批判がエンゲルスからあった(エンゲルスがこの批評のなかで右の「資本が求められる」という点について誤った理解を示していることについては筆者著『貨幣信用論研究』四二—五ページ)。マルクスは通貨主義批判のこの手紙のなかで、金流出のさいイングランド銀行の利子率が引上げられることを見ているが——上の一八五三年一月二十九日付の手紙でエンゲルスにたいして「われわれは、これがなにを意味するかをよく知っている」と書いているに当っては、おそらく兩人間にこうした手紙の往復があったことが念頭に置かれていたのではなからうか、と想像される——、そのはじめのところでつぎのように述べている。——「通貨主義によれば」イングランド銀行は、地金が流入するときには、その発券高を増加し、地金が減少するときには、割引の縮小や政府証券の売却によって、発券高を縮小しなければならない。ところで僕は主張する、イングランド銀行はこれとは逆に行動しなければならない、すなわち、地金が減少するときにはその割引を増加し、地金が増加するときには成行きのままにまかせねばならない、と。そうしないと、近づきつつある商業恐慌を不必要に激しくすることになる。だがこれについてはまたほかのときに」(傍点—マルクス)と。通貨主義がその誤った金屬流通の理解の上に立て、紙券の流通をこの金屬流通の運動にしたがわせようとしたことがまちがいであること、また一八四四年のイングランド銀行条例などによってはかえって恐慌が人為的に激化され、右をマルクスが書いた一八五一年以前の二八四七年にも、またそのあとにも、結局しばしば条例停止

に訴えざるをえなかったこと、こうしたことはたしかであるが、しかしさればといって、右でマルクスが「主張」していることも、金の国外流出に対処する措置としてはかならずしも妥当なものであるとはいいがたい。そしてこの点は「資本論」では意見が變つてきていると考えられる。たとえば、「かれ(イングランド銀行理事、元総裁パーマー)の意見にしたがえば、イングランド銀行は逼迫期にも、為替相場の逆調によつて、金が外国に出てゆかないかぎり、一八四七年十月においても)利子歩合を五パーセントという元の高き一八四七年四月に引上げた高き」以上に引上げることがを要しなかったのである。一八四四年の条例がなければ、イングランド銀行は逼迫のさい、困難なしに、呈示されるすべての一流手形を割引しえたのであるう、と(上院『商業的窮境』一八四八年)証言一〇一八二〇号)『資本論』Bd. III, S. 606—7、長谷部訳、青木版七九一ページ、傍点—三宅)と記しているとき、マルクスは右の一八五一年二月当時と同様な見解の下にこう記していたのではないように考えられる。(なお、筆者稿「一八四七年恐慌」中の「イングランド銀行の金屬準備の減少と利子率の引上げ」の項参照)

以上の註(3)(4)は、事態としてはいまこの一八五三年一月当時の段階で論ぜられるべきことではないが、マルクスがたまたま上のようなことを記しているの、それにかんれんして記しておく次第である。

マルクスはさらにこの金流出について、つぎの一八五三年二月八日付の論文「国防。—金融。—貴族の減少。—政治(Verteidigung. — Finanzen [Finances. — MRubel; Bibliographie, p. 95] — Abnahme der Aristokratie. — Politik)」(『トリビュン』一八五三年二月二十三日号所載)ではつぎのように述べている。——「イングランド銀行報告は、金保有高がさらに「最近の週報を前週と比して、という意であろう」三六二、〇八四ポンドだけ減少したことを示している。最近二週間に約百万ポンドが、一部は大陸へ、一部は鑄造されてオーストラリアに輸送された。フランス銀行の金保有高も同様に減少しているから、組織的な私的退蔵(ein System privaten Aufschatzens)が生じていることは明らかであり、このことは、ナポレオン政府の持続にたいする一般的な不信の有力な証拠である(この退蔵というのは、フランスにおいてはばかりでなくイギリスにおいてもそうだとはいつていいであらうか?)」(Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 87,

## 八

一八五三年二月ミラノにおいてオーストリーの支配にたいする叛乱が起った。エンゲルスはこれについて一八五三年二月十一日付マルクス宛の手紙で、「全事件はただ徴候としてのみ重要であるように思われる。一八四九年以来の抑圧された状態にたいする反動がはじまっているのだ、そしてもちろんもともとひどく傷ついたところにおいてだ。事件は当地に大きな影響を与えており、俗人たちは、今年は無事にすまないという意見に一致しはじめている。現在、穀物と棉花とが不作だし、金融逼迫 (Caldlemme) とそれに附随するものが起っている、これからが見ものだ! (nous verons!)」と書いた。<sup>5)</sup> このミラノにおける暴動は失敗したが、翌三月には「東方問題」が起り、ヨーロッパの政治情勢はこの一八五三年春からようやくあわたたしい動きを示しはじめてきた。そして七月には露土戦争がはじまり、この「東方問題」はヨーロッパ全体の政情を動かしていった(一八五四年三月英仏対露宣戦、一八五五年九月セヴァストポリス陥落、一八五六年三月パリ条約)。

(5) なお、『往復書簡』のインスティトゥート版では、「[一八五三年三月十一日]」と日付を推定して、つぎのようなマルクス宛のエンゲルスの手紙を収めている。エンゲルスはそこで「君は昨日のタイムズか一昨日のデイリー・ニュースかで、木綿工業の増大にかんする工場検査官ホーナーの統計を見たか?」として、「一八五〇年十月から一八五一年十月にいたる」間にマンチェスター地区の新設、既設工場において「三七〇〇馬力」の増加があったという統計を掲げ、さらにこの「一八五一年十月」から「現在」にいたる馬力の増加数についての推定を試み、「かくて繁栄期の追加資本がどこにあるかがわかる。ともかく恐慌がくるのはもうあまり長いことではないづあうい(Die Krisis kann übrigens nicht lange mehr ausbleiben)」当地

で過度の投機が行われているのはほとんど乗合馬車だけ〔*Last nur in Omnibussen*—これは比喩?〕ではあるが」と述べている。

インスティトゥート版ではなにをもつてこの手紙の日付を「一八五三年三月十一日」と推定したのかその理由は示されていないが、この手紙はペーベルとベルンシュタインとが編集した『往復書簡』では、「日付なし。ただし明らかに一八五二年のもの」(Bd.I, S. 381)として一八五二年分の末尾に収められていたものである。そして筆者も、つぎのような理由から、これは一八五二年に書かれたものと見られるべきではなからうかと思う。まず、ここでホーナーの統計が掲げられているのは、例の『工場検査官報告書』に載せられたものをいち早く新聞がとり上げ、それをエンゲルスがマルクスに注意したものと見てまちがいないであろうと思われるが、もしそうであるとすれば、右のような「一八五一年十月にいたる」統計を掲げた『報告書』が「一八五三年」になって刊行されたことではできないであろう。『工場検査官報告書』(Reports of the Inspectors of Factories etc.)は当時二回、それぞれ四月三十日、十月三十一日に終る半年間の報告書として刊行され、そして十月三十一日に終る方はいつもその翌年に入って刊行されていたらしい(『資本論』のインスティトゥート版第一巻、第三巻末尾に附されている *Literaturverzeichnis* 参照)。そして右の統計がのせられたのは『報告書』の「一八五一年十月」版であったのであろう。つぎに、さきに見た一八五三年一月十四日付の論文「政治的見透し。―事業の繁栄。―飢死事件」のなかで、マルクスは「ランカシャー地区の工場検査官レオナード・ホーナーは、一八五二年十月三十一日に終る半年にかんする丁度いま (eben) 発表されたかれの報告書においてつぎのように述べている」としてこれを紹介しているが、そこで掲げられている数字は「一八五二年十月三十一日」の時点に立っており、右のエンゲルスの手紙のものよりも一年あたらしい。ここからも右の手紙がこれより後の「一八五三年三月十一日」付であったとは見がたいであろう。(このような理由からこの手紙は「一八五三年」ではなく一八五二年に書かれたものと思われるが、では一八五二年のいつ頃と推定したらよいか。これについてはいろいろ考えられるがあまり細かいことになるので省略する。ある判断からは一八五二年のはじめ頃ということになるが、要するにはつきりしたことはいま知りうる材料からはわからない。)

なぜこんなことをやかかくいつているかという、一八五三年三月頃にエンゲルスが木綿工業における蒸気力の増大を挙げ、ここから当時ことあらためて「ともかく恐慌がくるのはもうあまり長いことではないであろう」という観測をマルクスに告げているということは、エンゲルスの手紙の系列から見て、いささか首肯しえない感があるからでもある。

マルクス（およびエンゲルス）は爾後「東方問題」にかんする軍事的、外交的、政治的な通信、ならびにその他各種の題目にかんする数多くの通信を書送っていったが——「よろず向きの女中（Mädchen für alles）」（一八五三年六月二日付エンゲルス宛のマルクスの手紙）——、他方、しかしイギリスの経済は、さきのような金流出にもかかわらず、すくなくとも一八五三年の八月頃まではそのまま好況をつづけた。一八五三年の通信においてマルクスはしばしばストライキについて報じているが、これもまずはじめはこの好況のもとで広汎に生じてきたことであつた。

マルクスはさきの一八五三年二月八日付の通信のなかで、「現在、一般に労働者は、とくに造船工、炭坑夫、工場労働者および手工業者は、賃銀値上げの要求を出している。この要求は、目下の繁栄から生じているもので、とくに注意すべき現象と見ることはできない。もっと注目し値する事實は、農業労働者の本式なストライキであつて、これはこれまで一度もなかった出来事である」（Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 87, 改造社全集訳、第五卷、五二四ページ、大月選集訳、第六卷、一七八ページ、傍点—三宅）と書いていたが、また同年六月十七日付の通信のなかでは、イギリスの輸出は一八五三年に入つて増加テンポを強めているが他方で「イギリス全土に、とくに北部工業地方で、ほとんどたえまないストライキの波がおし寄せた」とし、そして「このストライキは、生活必需品価格の一般騰貴と同時に過剰な労働力が相対的に減少した必然の結果であつた」と述べている（「イギリスの好況」——ストライキ。——東方問題<sup>6)</sup>、『トリビュン』一八五三年七月一日号所載、大月選集訳、第六卷、二二六ページ、傍点—三宅）。この労働力の減少は、当時のさかんな海外移住によるものであつた、——同年七月一日付の通信では「労働者のストライキと団結は、いままでにない規模で、急速に發展している」として各地からストライキが相ついで報ぜられておりとし、「いま起つていストライキの特徴は、『これまでと反対に』それが不熟練（非工場）労働者の下層、移民の影響を直接受けている職人たち

の間ではじまり、それから徐々に大ブリテンの大工業中心地の工場プロレタリアートを捉えてきた点にある。……この現象は、まったく海外移民の影響に帰せなければならぬ<sup>7)</sup>（『労働者のストライキ。―国民憲章』、『トリビュン』一八五三年七月十四日号所載、大月選集訳、第六卷、二三四―五ページ、傍点―三宅）。また同じく同年七月二十九日付の通信ではつぎのように述べている、――『世界は労働者の天国となりつつある。人間は貴重なものとなりつつある！』――と『タイムズ』紙は絶叫している。一八四九年、一八五〇年、一八五一年、一八五二年に商業がたえず発展し、産業がかつてない規模に発達し、儲けが不断增加したそのときに、労賃は一般に動かず、多くの場合一八四七年の恐慌期にきめられた低い水準に釘づけにされていた。海外移民によって人口が減少し、生産必需品の価格騰貴によって国民の欲望が刺戟され<sup>8)</sup>「？」てから、ストライキが起り、それによって賃銀が引上げられた。そこで『タイムズ』紙の眼から見ると――世界は労働者の天国になりつつあるのである<sup>8)</sup>（『辻駈者。―ストライキとこれにたいする闘争』、『トリビュン』一八五三年八月十二日号所載、大月選集訳、第六卷、二五二―三ページ）。

(6) リヤザノフ編の *Gesammelte Schriften*, 1852 bis 1862 の編者序言によると、一八五二―六二年の間にマルクス（およびエンゲルス）が『トリビュン』その他の新聞雑誌に寄せた論説の数は「数百に（auf einige Hunderte）」及んでいた（Vorwort des Herausgeber, Bd. I, S. XI）。しかしこの *Gesammelte Schriften* はこれらの論説を網羅しようとしたものではなく、網羅はかれが予定していた *Gesamtausgabe* に譲られていた。しかも、この *Gesammelte Schriften* も一九一七年に第一、第二巻が刊行されたただけであって（編者序言によると「この二巻はある意味では一つのまとまった全体をなしている」――a. a. O. S. XV ――田であるが）、収録論説は一八五五年どまりとなっている。リヤザノフは、第三巻では「ニューヨーク・トリビュンおよびピープルス・ペーパー（People's Paper、チャーチストの機関紙）（一八五六―一八五八年）からの諸論説が採録され、そのなかには、イギリス、フランス、プロシヤ、オーストリー、スペイン、ザルジニアにかんする諸論説、クレディ・モビリエ（Credit mobilier）にかんする一連の論説、露英同盟の歴史、イギリス（一八五七―一八五八年）に



かんする、インドにおけるイギリスの支配と大反乱にかんする、一八五七年の商業恐慌にかんする、諸論説が入っている」とし、また第四巻には、「一八五九年のヨーロッパの恐慌およびイタリー戦争にかんするニューヨーク・トリビュンおよびフォルク（Volk. ロンドン刊のドイツ誌）からの諸論説、『フークト氏』、アメリカのエンサイクロピディアからの重要な論文、ニューヨーク・トリビュンならびにウィーンのプロッセ（die Presse）からのイギリス（一八六一—一八六二年）およびアメリカの南北戦争にかんする諸論説を含んでいる」と記していたが（a. a. O. S. XVI, 傍点—三宅）——いうまでもなく右に傍点を附したものは本稿としてはきわめて必要であるはずのものであるが——この第三、四巻は刊行されなかった。

Gesammelte Schriften の事情はかくのごとくであつて、第一に既刊の一八五五年までの分についても網羅的でないこと、第二に既刊の収録年月が一八五五年末で終わっていることのため、遺憾ながら今日のところ、この期の多くのものを原文のまま（あるいは英文独訳の形で）見ることができない。ところで、大月書店刊『マルクス・エンゲルス選集』では——改造社版『全集』が Gesammelte Schriften の構成によつてゐるのになし、——このリヤザノフ編書の収録論文以外のものがかなり収められている。この場合なにを基にした訳なのか明らかでない。大月選集の収録の仕方はかかるものであるが、しかし選集に収められているこれらの論説のうちには、本稿として有益なものがいくつもあり、これらを抜きにしてゆくわけにもゆかない。したがつてさしあたり、以下いくつかこの選集を利用してゆくこととする（利用に當つて文章の書き方については若干書改めたところがある。また「」内はいずれも三宅の挿入したもの）。

上掲の「イギリスの好況。——ストライキ。——東方問題」はこうしたものの一つである。大月選集からの利用のまず最初に當り、以上のことを断り書しておく。なお、M. Rubel の Bibliographie では同じく執筆日付一八五三年六月十七日、『トリビュン』七月一日号所載の論説として India Bill/Brunnow and Clarendon/Armenian Proclamation という表題を掲げている。この表題は Karl Marx, Articles on India, Bombay, 1943 から採られたようであるが、同日付の論説には上掲のもののほかにこれらの項も含まれていて、それぞれが収録している部分の表題を掲げているのでこうなつてゐるのである。以下大月選集にもつばらよる論説の表題は、そのうち若干を除いては、このリューベルの Bibliographie で掲げられてゐるそれと同じ日付の論説の表題のなかには欠けている。このこともまねおきとしてここに併せ記しておく。

(7) ここでマルクスはまたつぎのように述べてゐる、——「ストライキと労働者の団結の意義を正しく評価するためには、わ

れわれはその経済的結果の外見上の貧弱さに惑わされてはならない。われわれはなによりもその精神的、政治的結果を考慮に入れなければならない。現代の産業は沈滞、活況、好況、恐慌、窮乏というように週期的に景気循環をくり返し、それにとまって賃銀が急激に上下し、また賃銀と利潤の変動に応じて雇主と労働者との間断ない闘争が行われているが、——このことがなければ、大ブリテンと全ヨーロッパの労働者階級は、抑えつけられた、自分の意志をもたない、しいたげられた、そして抵抗能力をもたない大衆となつてしまつたであらう」と(同上訳、二二六ページ、傍点—三宅)。

(8) この選集訳通信の末尾に、「私〔マルクス〕の予言を完全に確認している」として、『マンチェスター・ガーディアン』紙の「今月〔一八五三年七月〕二十七日の社説」からつぎのような記述が引用されている、——「商業界の雰囲気が、不安を助長する不確信の要素でこのようにみだされたことはめつたになつた。われわれは慎重にこうしたやわらかい言葉を使つているが、穀物法が廃止され、自由貿易政策が一般的に適用される以前ならば、もっと強い表現——重大な恐慌〔危機?〕という——を使つたであらう。右に述べた不確信の要素とは、第一に予想される穀物の不作、第二にイングリランド銀行の金庫からの金の流出、第三に戦争の大きな公算である」(同上訳、二五五ページ、傍点—訳書のもの)。

ところがこの様相は秋になるともにやや變つてきた。一八五三年八月十二日付の通信によると、「商務省から発表された一八五三年の上半期(七月五日に終る)における貿易および海運にかんする報告は、一八五二年の同期における輸出入および海運にかんする資料と比較すると、貿易額がいちじるしく増加していることを示している」とされており(イギリスの人口と商工統計。―労働者団体法案。―アイルランドにおける地主と小作人、『トリビュン』一八五三年八月二十四日号、大月選集訳、第六卷、二六二ページ)、また『資本論』第三部第六章「価格変動の影響」第三節「一般的例証、一八六一―一六五年の棉花恐慌」のところでは『工場検査官報告書』からのつぎのような引用が掲げられている、——「私は十七年間にわたりランカシャーの工場地帯の状態について職務上の見聞をえてきたが、その間かつて私はこんな一般的繁榮に出会つたことはなかつた。活動はすべての部門において異常である」と(『工場検査官報告書』一八五三年

四月、『インスティトゥート版』Bd. III, S. 150, 長谷部訳、青木版二〇二ページ、傍点一三七）。マルクスはここに「一八五三年四月。大繁栄（Große Prosperität）」と記しているが、しかし、ついで「一八五三年。十月」としては「木綿工業の不況」と記し、そこでは「過剰生産」（『工場検査官報告書、一八五三年十月』）という引用句を掲げている（Bd. III, S. 150, 同上訳、二〇二ページ）。

すでにすぐ右の註（8）のような新聞論調が七月末に現われてきたことが掲げられているが、また一八五三年九月二十三日付の通信ではつぎのように述べている、——「最近の四週間に、工業地方ではおどろくべき変化がおこった。七月と八月のはじめには、すべてが幸福に輝いていた。かすかにそれを曇らせたものはただわずかに遠方の『東方問題』の黒雲だけであり、またこれを曇らせたものはおそらくこれよりやや多く、労働力の不足のためにわが綿業資本家が、かれらに有利に見える事業の大きな可能性を汲取れるだけ汲取りえないのではないかという心配だけであった。……しかしいまでは、晴れ渡った経済的繁栄の青空に黒雲が出てきたことを認めなければならない。……これまで考えられていたように、自由貿易の国では経済的動揺や商業恐慌や過剰生産の反復はまったく不可能であるという自由貿易主義の幻想が消失しはじめ、勇敢な工業界の冒険家たちもそれをぼんやり理解しはじめていることは、いまや事実である」云々（『工業恐慌の兆候』、『トリビュン』一八五三年十月七日号所載、大月選集訳、第六巻、二五七—九ページ、傍点一三七）。

前記のように一八五三年一月六日と二十日とに $\frac{1}{2}$ パーセントづつ引上げられて三パーセントになっていたバンク・レートは、六月二日さらに $\frac{3}{4}$ パーセントに引上げられていたが、九月に入ると、一日、十五日、二十九日と月中三回にわたって $\frac{1}{2}$ パーセントづつ引上げられ、五パーセントの高さになるにいたった。五パーセントというのは一八四

七年の四月パニックのさいに採られたレートであり、また十月パニックのち同年年末頃唱えられていた高さであつて、以来約六年近くぶりのことであつた。なお九月一日に四パーセントに引上げたのも、一八四八年六月に景氣の好転に伴つて四パーセントから三 $\frac{1}{2}$ パーセントに引下げて以来のことであつた。

マルクスは一八五三年九月十七日付エンゲルス宛の手紙で、「商業恐慌にかんする二論文はすでに送った『トリビュン』宛に」。一つは八日前の金曜日〔九月九日〕に、イングランド銀行、その割引、ピール条例の作用またはむしろその意図している作用について、一つは最近の火曜日〔九月十三日〕に、穀物価格、過剰生産の徴候、等々について〔当時ニューヨークへの輸送便は週に二回、火曜日と金曜日とであつた。それゆゑ、マルクスの論文はすべてこの二つの日の日付となつてゐる〕——*Gesammelte Schriften* でのリヤザノフの序言、Bd. I, S. XXVI. ——と書いてゐるが、これらの通信は *Gesammelte Schriften* にも大月選集にも収められていない。<sup>9)</sup>ただ大月選集に入つてゐる一八五三年十月七日付の論文のなかに、つぎのような記述が見受けられる、「トリノ、パリ、ベルリンおよびワルシャワの諸銀行は割引歩合を引上げた。先週の『イングランド』銀行報告によれば、イングランド銀行の金準備は一八九、六一五ポンドだけ減少し、その額はいまではわずか一五、六八〇、七八三ポンドになつてゐる。銀行券の積極的〔?〕流通は五〇万ポンドだけ減少したのに、手形割引は四〇万ポンドだけ増加した。この一致〔?〕は、流通する銀行券の総額は実施される『イングランド』銀行の諸操作の規模に比例して増減するものではない、とピール法にかんする通信〔これは右の手紙でいつてゐる論文であろう〕のなかで述べた私の意見を確認してゐる」〔割引歩合の引上げ。――不作とその結果。――ストライキ。――反労働者同盟、』『トリビュン』一八五三年十月二十一日号所載、大月選集訳、第六卷、二七三ページ〕。

イングランド銀行がバンク・レート<sup>10)</sup>を相ついで引上げたばかりでなく、ヨーロッパ大陸の各国で割引歩合の引上げ

が行われたわけである。イングランド銀行の金属準備については前掲の一八五三年八月十二日付の通信のなかでも、「現在すでにイングランド銀行の金保有高は毎週減少しつつあり、すでに一七、七三九、一〇七ポンドまで落ちている」(大月選集訳、第六巻、二六六ページ)と記されており、これが十月七日付通信で一五、六八〇、七八三ポンドにまで下っているといっているのであるから、九月にバンク・レートの急角度の引上げが行われたにもかかわらず、なおこの間八週間ばかりの間に二百万ポンドほど減っていることになる。また、既掲のように一八五三年一月一日には約二千万ポンドの金属準備があつたのとくらべると、年初来約五百万ポンド減少したことになる。しかし、このあと一八五三年十二月一日には一五、〇九三、〇〇〇ポンドとされており(『資本論』、Bd. III, S. 397, 長谷部訳、青木版七七九ページ)、減少度がすくなくなっている。この辺の事情については、W・ニューマーチは一八五七年の「銀行条例委員会」での証言のなかでつぎのように述べている、——「第一五〇九号。一八五三年の末頃、公衆の間にいちじるしい恐怖が起りました、九月中にイングランド銀行は、三たび相ついでその割引率を上げました。……十月初旬には……公衆の間の心配と不安はかなりの程度に達しました。こうした恐怖と不安は、大部分十一月末以前になくなり、そしてオーストラリアからの五百万「ポンド」の貴金属の到着によつてほとんどまったく取除かれました」(傍点—三宅)。そしてこれにつづけてつぎのように述べている、——「一八五四年の秋、十月と十一月とに六百万「ポンド」に近い貴金属が到着したさいにも、同じことがくり返されました。同じことは、一八五五年の秋にも、これは御承知のように昂奮と不安の時期でしたが、九月、十月および十一月に約八百万「ポンド」の貴金属が到着したことによつて、くり返されました。一八五六年末にも同じことが生じました。要するに、委員会のほとんど各位の御経験に訴えうることだと思ふのですが、われわれはすでに、どの金融逼迫にさいしても、金の船の到着を自然的な完全な救済策と見る

ことに慣れてしまっているのではないだろうか」〔資本論』 Bd. III, S. 613. 長谷部訳、青木版七九一八〇〇ページ。ところが一八五七年の十月、十一月にはどうであつたか、ということがつきに質問され、あるいは陳述されねばならぬことたるわけである)。

(9) 大月選集所載の「著作年表」——これはロシア語版全集の訳であらうか?——によると、九月九日付「ウィーンの覚書」。

——イングラント銀行。——その割引。——ピール条令の作用または希望上の作用、『トリビュン』九月二十四日号所載、および九月十三日付「政治情勢。——イングラント銀行。——ヨーロッパにおける穀物不足」、『トリビュン』九月三十日号所載、なる論文が記録されている(大月選集、第十八巻、九一ページ)。

(10) 銀行券の流通高の増減と銀行の保有する有価証券の増減との関係の問題は、これまたマルクスの大いに興味をもった点であつて、『グルンドリッセ』第一冊の冒頭でもこの問題が取扱われ、そこでつぎのように明快に述べられている、——「もしも、割引に呈示された手形の分量と『通貨の需要』とが、つまり本来の意味での貨幣流通の需要とが、同一であるならば、銀行券流通高は割引かれた手形の分量によって決定されなくてはならないであらう。けれどもこの運動は、概して、たんに平行していないばかりか、むしろしばしば反対になつてゐる。割引手形の分量とその分量の諸變動とは、信用にたいする需要をあらわしているのであつて、他方、流通している貨幣の分量は、まったく別の諸影響によって決定されるのである」(Grundrisse, S. 35. 大月選集訳、第九巻、二八六ページ)。また後年の『資本論』第三部第五篇においても、フラートンにたいする批判として、イングラント銀行の保有する有価証券が増加するようないに同行の銀行券流通高が減少するといふことが、いかにして生じうるかを解明している(筆者著『貨幣信用論研究』、四〇三—四四ページ参照)。

一八五三年十月七日付の論文では右に見たところにつづいて、某「商況月報」からつぎのような記述を引用している、——「この数週間の政治的諸事件は、麦の不作や、馬鈴薯病の蔓延や、船舶量の不足などの報告がますますふえているために穀物取引を支配している不安を、大いに増大させた。……普通は価格は收穫ののち復活祭までは下る傾向にあるのだが、今年は運動は反対の方向をとつてゐる。……最近価格がしだいに騰貴しているのは、現在穀物が不

足しているからではなく、穀物の不作によって不足が近いうちに予想されるからであって、その結果は年末に現われると考えられている。……予想されている高い価格水準は、この冬は維持されるように思われるが、この高水準は来春には、ふだんは距離が遠く運賃が高いために近づくことができない世界の離れた諸地方からの穀物輸入を増加させる餌に多分なるであろう。来春には世界のすべての地方からの輸入を期待することができる。……すべての人が、いまは買おうとしているが、そのときには売ることがスローガンになるであろう。来年は一八四七年のような危険で悲惨な年となるかもしれない」(大月選集訳、第六巻、二七三—五ページ、傍点—訳書のもの)。マルクスは前掲の一八五三年八月十二日付の通信のなかでも、他の某商会の「報告」から、「小麦の収穫は、多分、一八一六年以降の全期間を通じて、最低であろう。そして一八五四年の収穫が非常に早く熟さないかぎり、われわれはあらゆる種類の穀物を一八四七年をさえ上廻る量で、……輸入しなければならないであろう」云々という記述を引用していた(同上訳、二六六ページ)。もって、マルクスがこのたびの不作にかなりの期待をかけていたことを窺うことができる。なお、一八四五年の不作につづいて四六年は一その不作で、一八四五年から四七年の間イギリスではかつてないほどの穀物輸入が行われ、穀物価格は一八四七年五月に頂点に達したが(小麦一クォーター一〇二½シリング)、四七年の収穫良好がたしかとなりかつ輸入投機の現物が到着したので、ついで価格は暴落となり(九月十八日四九½シリング)、イングラント銀行の金融引締と相まって、八月、穀物商社の大規模な破産が生じた、——一八四七年十月パニックの前に生じた「穀物恐慌」(筆者稿「一八四七年恐慌」中の「凶作と穀物輸入投機」の項参照)。右の記述のなかで「一八四七年」が引合いに出されている所以である。

また同じく右の一八五三年十月七日付の論文ではひきつづいてつぎのようにしるされている、——「マンチエスタ

市場では全般的な不景気がつづいている。オーストラリアや中国や東方の紛争やについての報道がますます不吉な性格を帯びるにつれて、紡績業者や工場主や商人の間の不安は大きくなっている。…… / 同じような沈滞はリーズ、ブラッドフォード、レスター、およびノッティンガムでも見られる。……さし当り見たところ順調に発展しているただ一つの工業部門は、バーミンガムとその附近の鉄および鋼鉄製品の製造である。 / ロンドンでは小商店主の間に破産する機会がふえはじめている」(同上訳、二七—五七ページ)。<sup>11)</sup>

(11) この頃、マルクスとエンゲルスとの間につきのような手紙の往復が見られる。この頃の『トリビュン』への論説を見る上に参考となるので、また兩人の協力を窺いうる一例として、引抄しておく、——もともとこれらの手紙と『トリビュン』への論文との結びつきは、『トリビュン』の綴込みでも横にないと正確なところはわからないが——。

一八五三年九月七日付マルクスからエンゲルスへ、「事業の状況について詳しく書いてくれないか、すぐに英語で」。

九月九日付マルクス夫人からエンゲルスへ、「……ロシアとトルコの軍隊配置について書いたものも、カールは無心しています。事がまだ片づいていませんので、かれはそれについて書きつづけてゆかねばならないのです。アメリカ人は東方問題では大騒ぎをしていますから。 / カールは今日また一つの長い経済論文を搾り出しました」(前記の九月九日付のイングランド銀行にかんするもの)。かれは非常に疲れていますので、今晚はわたくしにペンをまかせました」。

九月十七日付マルクスからエンゲルスへ、「きみはおそろしく無口になったものだ。昨日(十六日)、『トリビュン』に發送する金曜日」はきみの論文を予期していたので、最近の情報だけを書出しとして纏めておいた。ところが手紙がこなかったもので、通信が一つだめになった。 / 今日からはじまる二週間は、どうしてもきみの協力を求めねばならない。…… その間にきみがいくつか書いてくれるなら、ぼくの方では別のものをきみに送って見てもらう。そうしたらきみは、デバ「ジュルナル・デ・デバ」紙」その他でトルコにかんしてのついている最新の情報だけを、あるいはとくに重要な電報があったらそれを、後か前かにつけて、そいつをリヴァプールに送ってくれないか「これは「西ヨーロッパ列強とトルコ」(一)となったものであろうか」 / 火曜日(九月二十日)の分として、きみの一論文を期待する。 / 諸軍の位置等々についてなにか述べることも大切であろう。イギリスの新聞には馬鹿げたことがたくさん出ている。…… / 商業恐慌にかんする二論文はすでに送っ



た〔ここは前掲〕。……工場地帯についてはもうすこし詳細を知ることが大切であろう」。

九月十九日付エンゲルスからマルクスへ、「これまで多くの仕事と手紙書きを妨げていたのは、『老人（ハイルヘルム・ヴェルフ）』の存在だった、かれはしばらくのところに泊っていた。……ぼくは、トリビュンの通信が往々いかにしてできるかをかれに感づかせたくないのだ。……〔今〕晩はぼくの時間になるだろうから、きみのためにこの附近の事業の状況について一文を纏め上げることができ、それは第二便で送る（これが既掲の九月二十三日付の論文「工業恐慌の兆候」——大月選集所載の「著作年表」では九月十九日—二十三日執筆として「西ヨーロッパ列強とトルコ」）。『工業恐慌の兆候』と記録されている——であろうか？。ロシアの論文はできるだけ早く書く」。

九月二十九日付エンゲルスからマルクスへ（右の九月十九日付との間の手紙がすこし欠けている？）、「トルコ軍にかんする論文同封する〔右の「著作年表」によると、九月二十九日付「トルコの軍隊。——連合艦隊のダーダネル海峡通過。——株式取引所の恐慌」、『トリビュン』十月十七日号所載、なる論文が記録されている、第十八巻、九一ページ〕。ランカシャーのストライキと事業の状況にかんして明日〔九月三十日金曜日〕きみがあちらに送るものをぼくに書いてくれれば、ぼくはそれにつづけることができる、そして火曜日〔十月四日火曜日〕までにこの問題にかんするつづきの報告をつくって上げよう。当地では製造業者と商人とが、事態はそんなに悪くないと大いに骨を折って互に嘘をつき合っており、またガーディアン〔紙〕も全力を注いでいる。だがそれらはことごとくつくりごとであり、ごまかしである。……穀物は上向き、糸は下向きであり、そしてトルコの件（Schickel）は、冬中当地の商人を弱らせるのにこの上なく都合な方向に進んでいる。——製造品〔織物〕もみごとに下落している、しかもこれにあつては滞貨は糸の場合よりはるかにひどい。したがって、工場主たちの休業の決議はかれらにとって一挙兩得となる。(+)、それは労働者を武装解除する、(=)、それは生産を減少させる。プレストンの連中はたしかに一般の感謝投票をうる、弁償はうけないまでも（ストライキにたいする對抗策として工場閉鎖が計られ、「プレストンの工場主たちがこの先陣をうけたまわった」〔前掲、十月七日付論文、大月選集訳、第六巻、二七七ページ〕。アシントン、ステイリブリッジ、グロソップでも工場主たちは休業を考えている、当地でも若干のものが。しかしそれにも難点がある、というのは、これは休業しない者にだけ利益であつて、休業した者は損になるだけだから」。

九月三十日付マルクスからエンゲルスへ、「戦争の件はみごとだ〔右の「トルコ軍にかんする論文」のことであろう〕。……事態のつづいて六カ月の間に、ぼくは間をおいて、長い一連のストライキ論文をすでに書いてきた。いまだしかにあらた

な「転換が現われている」(Jetzt allerdings ein neuer turn eingetreten)。きみのストライキ概況を利用して書いた論文のなかでは、たくさんストライキ地名を挙げておき、プレストンやウィーガンの件も書いておいた。マンチェスターについては材料を集めることができなかった。ぼくはプレストンの戦術を(非常にかんたんだが、注意)、(一)、過剰生産からの退却を労働者たち——かれらはその要求によって工場主たちをしてその工場閉鎖を余儀なくさせた——によってカヴァーさせようとする工場主たちの企てとして、(二)、労働者たちを兵糧攻めにして屈服させようとする企てとして、述べておいた。／／きみが見るように、ぼくのストライキ談は前の火曜日までのもので、かつマンチェスターには触れていない。きみは糸と棉花との価格についての——できれば織物類の価格についても——覚書をすこし引伸して、すくなくとも一通信のパラグラフをなすくらいにすることができたらう。……／／なにか軍事的な動きが現われたら、マンチェスターの陸軍省(エンゲルスのこと)からの迅速な訓令をあてにしている。棉花についても同様で、これについては当地の新聞の報道は貧弱なものだ。……／／時機がよいから、なにはさておき、ぼくは奴っこさんたち『トリビュン』編集者」が息がつまるほど書きまくってやろうと思っている。で同時にもしきみから供給してもらえらるなら、諸々のテーマにもっと長い時間を振当てることができる。そのうえ、ぼくは秘書がいないと、英語はいさか心配なのだ」(傍点—三宅)。

十月八日付マルクスからエンゲルスへ、『ビーペルの入院』(九月十七日)——同日付エンゲルス宛の手紙——以来ぼくは六つの論文を送った。そのなかにはパーマストンにたいする峻烈な一弾劾文がある。……金曜日「十月七日」の論文は夜書いた、そして朝の七時から十一時まで妻に書取らせ……「さきに『十月七日付』として見てきた論説「割引歩合の引上げ。——不」とその結果。——ストライキ。——反労働者同盟」が日付の上からいうとこれに当る。この論説には、訳出されている部分から見ても、右の九月三十日付の手紙ですでに記されているようなことが含まれているが、これがエンゲルスに送ったり、送り返されたりして遅れたのであろう。なお、九月十七日から十月七日までの間に「六つの論文」を送ったとされているが、大月選集所載の「著作年表」で上掲九月十九日—二十三日執筆と記録されているものを二つのものとすると、これに「パーマストン」を含めて計六つとなる」。

さきに、ストライキはまずはじめは経済の好況のものにおいて広汎に生じてきたことであつた、と記しておいたが、そして前掲の諸記述に窺われるようにそれらは賃銀引上げを収めたようであつたが、このストライキにかんする

様相も秋になるとともに変わってきた。右の註中の一八五三年九月三十日付エンゲルス宛の手紙のなかでマルクスは、「いまだしかにあらたな一転換が現われている」と記しているが、工場主側によって工場閉鎖などがストライキ対抗策として、かつまたストック過剰の対策として、採られるようになってきた。そしてこのあと、たとえば十一月四日付の通信ではつぎのように述べている、——「私は、労働者がそのストライキの直接の目的を達するであろうとは、けっして思わない。反対にまえの通信の一つのなかで、私は、近い将来に労働者はもはや賃銀の引上げのためではなくその引下げに反対してストライキをやらねばならなくなるだろう、と指摘した。いまでもすでに賃銀引下げの場合がしだいに頻繁になっており、それにつづいて、これに相応する数のストライキがおこっている。この全運動の真の結果はつぎのことであろう。すなわち、私がすでにほかの機会に述べたように、労働者階級がストライキを通じて獲得するあたらしい組合の組織がかれらにとってどれほど大きな意義をもつものであるかが明らかになるとき、そのとき『労働者階級の活動は急速に政治的領域に移されるであろう』。アーネスト・ジョーンズその他のチャーチストの首領たちは、いまやふたたび『戦場に立っている』云々（ウィーガンの炭坑夫）、『トリビュン』一八五三年十一月十八日号所載、大月選集訳、第六卷、二八九ページ、傍点—訳書のもの）。また同年十二月二日付の通信のなかでもつぎのように述べている、——「イギリスの工業地帯には雇主と労働者との間の戦闘が荒れ狂っている。おそらく諸君は、労働者の労働週短縮運動に雇主がはげしく反対し、それについて激昂したときのことを覚えていられるであろう。ところがこんどは、われわれはその反対の現象を見るのである。……ロックアウトは、雇主の側における財政手段としての、すなわち「価格の歴史」上に前例のない生産過剰にたいする独特の解毒剤としての、その真の性質を明らかにしている。……一週四日労働でもまだ需要を超過するのである。……ほとんど三週間も前にすでにプレストンの企業家は、

二十週分の生産に相当するストックをもっており、それを売捌くことがほとんど不可能だったのだ。したがって、工業恐慌はこれからはじまるまでもないのである。それはすでに目前にあるのだ。……未曾有の好況によってつくり出された有利な可能性がすでにほとんど消滅してしまつた時期に、あまりにも遅れてはじめられた労働者のストライキは、経済的見地からみれば、すなわちその直接の目的にかんするかぎりでは、成功しえないということを、私はさき一度ならず指摘した。しかしそれらのストライキは、それ自体の仕事を果たした。それらは工業プロレタリアートを革命化した。だがそれらのストライキは食糧品の高価格と安い労賃とによってひきおこされたのだから、それらの政治的結果はやがて時を追って現われてくるであらう。労働議會——それは事実上チャーチズムの旗のもとに全労働者を結合するということにほかならない——の理念は、いまでもすでにブルジョア新聞に恐怖を呼びおこしている」(「産業の災厄」、『トリビュン』一八五三年十二月十六日号所載、同上訳、二九—二ページ、傍点—三宅)。

以上見てきたように、一八五三年は一月早々イングリランド銀行のバンク・レートの引上げが行われ、三月には「東方問題」が起つてこれは七月露土戦争に発展し、金流出にたいして九月にはバンク・レートが三回にわたつて引上げられ五パーセントになるにいたつた。マルクスは、ストライキ、不作、生産過剰、と経済の様相が秋には悪化に転じてきたことを告げ、「工業恐慌」は「目前にある」とさえ述べた。だがしかし、このたびも、一八五三年がすぎ一八五四年に入つても、事態はマルクスの期待のように経過してはゆかなかつた。

後年のマルクス自身による記述を見ても、たとえば『資本論』第一部で「イギリスの木綿工業の運命」について「一瞥」しているところでは、「一八五三年には輸出増加。プレストンにおける八カ月にわたるストライキと大窮

乏」と記し、ついで「一八五四年には繁栄 (Prosperität) 諸市場の過充 (Ueberfüllung)」と記されつゝなり (Bd. I, S. 479, 長谷部訳、青木版七三ページ)、また第三部での前掲「棉花恐慌」のところでは『工場検査官報告書、一八五四年四月』からのつぎのような引用が掲げられている、——「羊毛事業は陽気ではないが、すべての工場で完全操業をしてきた。木綿工業でも同様。梳毛糸業は過ぐる半力年全体を通じてまったく不規則であった。……亜麻工業では、クリミア戦争によりロシアからの亜麻および大麻の供給が減少したので混乱が生じた」 (Bd. III, S. 150, 長谷部訳、青木版二〇二ページ、傍点—三七)。また、同じく第三部第五篇で「一八二四—六三年のグレイト・ブリテンおよびアイルランドの輸出額の動きを掲げるところで、「一八五三年には約九百万、一八五四年には九七十万、一八五五年には九四・五百万、一八五六年には約一六百万であり、そして一八五七年には一二百万〔ポンド〕という最高限度に達した」 (Bd. III, S. 546, 同上訳、七〇九ページ、傍点—三七) とされているように、一八五四年、五五年には若干減つてはいるがしかしともに一八五三年と同じく九千万ポンド台という水準が保たれていたのである。

ところで、上来一八五三年についても、この年の金流出はなぜ生じたか、なぜ九月にバンク・レートが五パーセントにまで引上げられ、金融逼迫が生じたか、ということにたいする十分な説明はマルクスから聞くことができなかったが——前記の未見の九月の『トリビュン』への通信のなかではこれについての記述が与えられていたのではなかったかと推測されるが——、さらにまた、この一八五三年の記述で見てきたような、一八四七年の二の舞ええ予期された穀物投機はどうなったのか、ロックアウトが生産過剰対策という意味も含んでいるとされていたそうした生産過剰はどうなったのか、というようなことにかんする翌一八五四年の状況についてのマルクス（およびエンゲルス）の説明も、これを知ることができない。前掲のように、一八五三年の九月末マルクスはエンゲルスに宛て、『トリビュン』

編集者が「息のつまるほど書きまくってやろうと思っている」と記していたが、そして一八五四年にも五三年にひきつづいてかなりの通信が『トリビュン』に送られているが、すくなくとも紹介されているかぎりにおいては、そのなかにはイギリスの経済事情について述べているものはほとんどない(前掲「著作年表」においても、財政および穀物事情にかんするものが二、三見受けられるにすぎない<sup>12)</sup>)。また往復書簡の方でも、一八五四年には、イギリスの経済事情についてはほとんどまったく語られていない<sup>13)</sup>。そこで、いま執筆年月としては一八五四年は通りすぎることとし、つきに一八五五年の記述について見てゆくこととする。

(12) わずかに一八五四年三月二十九日付エンゲルス宛のマルクスの手紙のなかで、つぎのようなことがしるされているが――  
「タイムズのマンチェスター商業通信の報道が正しいとすれば、事業はなんととっても非常に悪いにちがいない。当地では毎日かなりの破産が見受けられる。パリでも同様だ。長い間骨折ってひきとめられてきた破産が、体裁よく倒れるためには、宣戦の時期を利用せねばならないのは、よくわかる(一八五四年三月二十三日英仏対露宣戦布告)」――見受けられるにすぎない。

(13) だが、つぎの一八五五年一月に書かれた『ノイエ・オーデル・ツァイトウング』連載の論文「商業恐慌(Die Handelskrise)」は、主として一八五四年の状況について論じているものである。